

## 詩人を嘖む

平野丈夫

青春讃歌に酔ふ若人よ!

惜みなく時の流れは逆く—驚愕の眼を欲てて今の中、忘れぬ中と書きなぐ

つた手記は、今可成の分量になつた。私は微笑み乍ら其れを抱へて出る。

此一節を前の「意味なき離合」と共に公開する。創作でも小説でもない。

A

彼が學校から自分の下宿へ戻ると、直ぐ雜囊を投り擲げて、ぶつ倒れる様に仰向けに寝轉んが。むさ苦しい初夏の時分に六時間も鍛へられて歸るとほんどうに疲れて仕舞ふ。

ふだんだと一度洗面場へ行つて上衣を脱いで、頭から顔へとざぶ／＼水をかけて洗ふのだ。半袖のシヤツはいつも洗濯を忘れず眞白にして居た。それは潔癖な彼に應はしいことであつた。水口の栓を開け放して置くとジャー／＼洗面器から溢れ出る。構はず兩手をそつと突込む。指先のインキの染みが浮ぶ。掬ひ上げて耳の中から首筋へついて居る石鹼の泡

を落してゆく。オールバックの髪がキ／＼いふのに梳つてゆく——ことは慥にいゝ氣持にちがひなかつた。約半時間も憊ふしてから部屋に戻つて熱い澁茶を啜り乍ら雜誌を漁つたり空想に耽つたりするのだ。

それなのに今日は、鞆を投げつけると部屋の真中にふんぞり反へつて、うまくもないに裏を無暗と吹き飛ばして居た。全く興奮し切つて居る。「何だい／＼」と頻りにぶつ／＼言つて居る。柱に破れた冬服やら麥藁帽が掛つて居るのを見て『あれが何かい。』と此處ものになで獨りで當り散らして居た。

『チエツ正島だつてさうだ。磯部だつてさうだ。大

体生意氣さ。上條だつてさうぢやないか。特待生だなんて高慢ちきな面してやがるからな。』と思つた。糞たれ、いつかも全寮の歌留多會があつた時に枚數を調べて居たら上條が覗き込んで『大体何枚あるもんですか。』なんて不思議さうに聞いて居たけ。あるもんですかもへつたくれもあるかい。歌留多の枚數も知らんでさ——抑々高等學校の入學試験に歌留多の枚數幾何とでも出さなかつたとは千慮の一失さ。かるが故にあんな上條の様な奴までが紛れ込むんだなんて考へて居た。

級中第一の劣等生——久能は今まで何度か恚ふした意表外に出會しては獨りで笑はずには居られなかつた。さうした片端から彼は級の噴みを受けて居た。歴史が赤丸なんて頭が悪いやねと言はれることは、馬鹿者と言はれる以上に辛かつた。いくら優しい男でも、事實が事實だから仕方ないとしても怒らないでは居れなかつた。その時は教室にある机をでんぐり返して扉をピタンと叩き締めて歸つて見たいと思つた。甞さへ俺は馬鹿だと自覺して居るに、譬へ座談の時だつて觀面にさう言はれると飲んで居た茶碗

も土瓶も、その奴の面に投げつけてやり度くもあつた。だが事實はさうにも仕様なかつた。

『久能！歴史は調べたかい。』と試験の二日前頃になつて正島は皮肉らしく聞いた。その口振りには此度も赤丸かといふ侮蔑と憐愍の色があり／＼と浮んで居る。言はれんでも彼は二週間前から何も蚊も放擲して勉強し、その頃は大低に終つて居た筈だ。

『あゝ、さうにか。』とまあ柔順しく答へるに越したことはないと思つた。『いんにや、未だ、よ。未だ二日もあるぢやないか、叶はにや一夜漬けるさ。』と誰れもの口調を真似る大膽さはなかつた。尤もさう言へば物笑ひになる許りであつたらうけれど。

『ぢや聞くよ、百年戦争の顛末？』大低の安買いも我慢は出来るが、余りだと彼もむつとせずには居れなかつた。恚んな大きい問題は答へるまでもないことではなかつたが。

『うん、それか、それや話しても宜いが話して居たら百年もかかるから。』と笑つて答へた。

『ぢや、もつと小さいところ——チャウセル、何かね。』

『チャウセル?.....は、あーチャウセルぢやないよ君、チヨースーと言ふんだらう。そりや君、チヨースーと言へば英國でも錚々たる詩人ぢやないかね。ルネサンス時代のね。君英詩界では元祖と謳はれてるんだせ。カンタベリーなんかの作があつたね。カンタベリーは一度僕も拾ひ讀みしたことがあるよ。三十二人の巡禮が、カンタベリーのトーマスベツケツトの墓へ詣る途中の物語に仕組んであつたあ、さうくポツカチオのデカメロンに似てる所があるね。序文にある風俗習慣は後代に於ける史學研究の唯一考證として尊重せらるつてノートにもあつたね。』と立て續けに喋つた。

チャウセルで失敗した正島はそれきりもう問ふこともしなかつた。

あれでも歴史ではお特意とされて今を時めく仁なんだからなあ、涙が零れる。本人はチャウセルと讀んでも、答案には Cha.....と綴るから成程採點には影響しない筈だ。怒にチヨースーと憶わて Cha.....なんて周章るよりか安全かも知れんと久能は馬鹿に感心しても見たことがある。チヨースーは甘を越ゆ

る此の日まで知らんでも、橄欖柏葉の大樹の下に若い命の泉も掬つた。久能は矢張り赤丸の噴みから免れなかつた。

B

彼は今日も學校であつたことを再び辿つて見た。

英語上教授の時間——

窓側の列が順々に當つて居た。低氣壓は何しろ此邊にあつたから此際反對側にある所謂極左黨の彼には關係のないことであつた。彼は安心して熱心に鉛筆で書き入れをやつて居た。

それなのに磯部が濟んでひよいと飛んで『久能!』と來た。

彼は驚いた『失策つた。』と思つた。立つて譯さうかと思つた。けれども平生あれ程よく調べて來て彼には可成特意に譯せた心意でも『先生!今の所始から譯して見て下さい。』といふ叛逆者も出て來る位だから、久能の譯かといへば級は一人だつて本氣になつて聞いて呉れるものは無いのだから、まして、今日の様には調べて居ない時には立つて下手に間違つく

よりも、きれいさつぱりと斷つた方がね、と思つた。

『調べて来て居ません。』

「教授の眼は光つた。」

『何故、ですか。』落着いた聲だ。

『……………』

『何故ですか、何故、調べて来ないですか。』

「教授は椅子から立ち上つた。さあおしまいだ素直に觀念するより外になかつた。こんなことなら高が英語のことでもあるし立つて怎ふにか譯せばよかつたにと思つた。だがモウ遅かつた。」

『調べて居たら急に腹が痛み出したものですから……………』あつと不味いことを言つて仕舞つたと思つた。余りに見せ透いた辨解だと思つたが始まらなかつた。しかしあの際、狼狽しきつた彼には無理もないことであつた。

『さうですか、調べる時には成可く腹が痛くならない様にしないといけません。』

此時に級はどつと笑つた。上條から磯部から星井も、チャウセルの正島も、そして級で野次好きの駒田もやんやと言つて笑つた。何でもつまらない些事

にまで揚足取つて級を笑はせ、それで得意になつて駒田には兼てから反感を抱いて居た。その駒田が『赤丸は免れんぞ。』と大きな聲で騒いで居るのが癪で、一層情けなく感じられた。けれど久能は赤い顔して黙つてリーダーの上を凝視して居た。

今迄誰れでも斷つて居たことだ。然し彼は本學期始めて斷つたのだ。愚直なまでよく調べて来て居る。今日だけは例外だ。それは昨夜のことが祟つたからだ。昨夜のために實は休みたい位に今日は疲れて居る。けれど學校にだけは出なければと思つて睡眠不足な赤い眼をしてやつて來た。欠席回数 of 畏しい掟があつたつてこんなことなら休めばよかつたと思つた。然し譬へ當つても一度位は斷つても見様と思つた。『やつて居ません。』と澄し込むことは級の人々へ對して一の愛嬌であり一の肝見せでもあつた。小心翼翼であり乍らも偶に恚ふした淺ましい虚勢もやつて見たかつた。

それが美事に失敗した。

他の教授にはいくら斷つても左程ないが「教授だけは八釜しいから今日の今迄誰れも斷り得なかつた

てふ真相を彼は知らなかつた。誰れに斷るのも同じだ。而も今日がお初だから威張つて斷つても罪のない所だと思つた。それが運悪くも今日の此時間に相手もあらうに此の先生に斷はるゝとは何としたことだつたらう。

正直な彼は歸ると頻りに憤慨して居る。

『何か、級！成績に俺には少しも羨しくないんだぞ。一二三とノートの通りに解つても解らんでも、暗記てふ萬能の武器を振廻して出来上つた統計表、その度盛りを一分でもせり上げ様と——それが彼等の全生命だ。何とした單純さだらう。俺は、それよりもあの神秘的な闇の奥底から漂ひ來る海潮の "Tata" の音に燃ゆる様な情熱を味つた方が幸福だ。果して彼等は俺を嘲笑る資格があるのだらうか。俺は、俺は「入學許可」の鼠色の封筒を握つた夜、恐しくハイカラな教授と名のつく紳士が壇上に立つて文學の講義をやつて居る夢を見た。テニソンやホイットマン、ウォールズグオースの名を、御用聞きごようきの魚屋が青物屋が品目を並べ立てる様に、流暢に繰る魅力まじまじな姿を判然と見たぞ。

『それは哀しくも自分獨斷な一種のユートピアであつた「我大日本古代史は伊弉那岐命の……」に度肝を抜かれた「剰餘の定理」や「孟子曰」や「物とは何ぞ」に又冷汗を流した。冗談じやない、こいつは新規巻き直しかと思つた。そんな筈はないがと思ふ端から、歴史、自然科學、數學……と赤丸の列を作つた。僅か一二回の作文としての機會はあつても、それはドラッグの忠孝の廣告で間に合つた位のものだ。

級のどうと笑ふのが靜まるとし教授は言葉を續けた『久能君、Practical wisdom. といふことがありません何か他に差支へもあつたでせうが、余計なことしなくともいふ、尤も廻り道をしめても目的に達することは達するかも知れません。けれども近道を取つた方が速いし、又安全でもあります。毎日の豫習を忘れず眞面目に學校のことをやるのが近道であります。恣あまふして學生の自分を盡して得た知識こそ所謂實際智識なんですから……』此處こと言ひ出した時にガラン／＼と鐘が鳴つた。お、解放の鐘よ、平和の鐘よ。

入り代つて次はB教授の獨逸語だつた。

牧川が當つて残り三行許りの所でつかへたもんだから『へへ……』と言つて座り込んだ。次に『久能！』と又來た。悪い時には悪いもんだと思つた。級の視線が好奇的に集つた。

何とした運命の悪戯だらう。

『久能、やつて！』第二發は來た。

覺悟するより他にない。前の失敗もあることだから兎に角立つことゝした。

久能はてんで語學なんて出來んど初鼻から見抜いて居るB教授が久し振りに、それも閻魔帖につける斜線が大低みんな三つも四つもあるにかゝはらず、久能一人が閑却された様にブランクだつたから思出した様に當てたといふに過ぎなかつた。お前の出身校はごこやいと無造作な口調で聞かれた時も、まるで特殊部落から來た位に思つてるかと憤慨したことがあつた。

『今の所やつて！』

牧川の譯せなかつた所だもの、俺に譯せるものか

と思つた。偶に當れば喰ひ嚙りの所かと思つた。

『讀みますか』彼はわざと落着き拂つて見せた。

『久能譯せるか』とB教授は苦笑した。

久能はさう言はれるとやつきとなつて譯して見やうとしたが慥に六つ難しい所だつた。

級は靜かだ。近くの駒田が指をポキン／＼いはせ乍らこちらを見て居る。また笑ひたくて待つて居るのか。淺はかな駒田よ——

『而して動物体の器械的刺戟と、他の無機的仕事との間には、結局、本質的の差異はない。が故に……』

『ウン……それから』聊か豫期に反したらしかつたやれ／＼やるんだぞと心の中で彼は緊張を感じた。

駒田は本を見出した。

彼の努力はこれからだつた。

『熟と仕事との間の一定不變の干係は生理學的燃焼説の一個の要請（はすくちからしんせう）であらねばなりません。』とこゝまでは牧川のよりは無難であつた。が要するにその邊から残りの三行は彼にも解らなかつた。

『難い哉、獨逸語は。』教授はせゝら笑ひをした。

蟹が泡を吹く様な物の言ひ様だが此、塵ときには仲

々明瞭に皮肉る。級も靜について笑つた。

久能は此んなことなんか思ひ出して癪でならなかつた。『當てやうことか、當てたりだ』と。それも昨夜のことが祟つたからだ。

C

昨日——日曜日の午後には彼は一人で八景水谷方面へ散歩した。

八景水谷の茶屋の傍を通ると折しも同級の磯部や星井や駒田の三四人が居て『いよう——詩人、飲め〜』とコップをつきつけた。彼はニヤ〜笑ひ乍ら腰かけた。

『それは何かい？』彼の懐からはみ出て居る赤表紙の本を指して磯部は恚ふ訊ねた。

『カラマヅフ——だよ』

『面白いかい、又創作かい。』

『カラマヅフの兄弟——さ。』

『誰れのだ』

『ドストエフスキー』止めておくれ磯部らしいことを聞くと思つたが無理に逆はず答へた。『ドストエフ

スキーのカラマヅフの兄弟を君知らなかつたのか。』漸くして彼は此れまで言へた。

『一向、ねへんそんなオカラドーフの兄弟なんて、俺、知らない。何んとかスキーよりもオールド、スコッチ、ク井スキーの方がいゝやねね駒田。』  
『よしてくんな、双六勝負、タラ、、、、……駒田は肩ゆすり乍ら得意のソブラノで茶化したか、コップを持上て『時に、だ、Heh 久能、今年は文藝部委員様に奉つてやるせ。選挙運動に一肌ぬいでやるから、前祝だ、一杯舉げたまひ……さあツカマセ詩人！しつかりシロイ。』

『久能君、どうした。何んとか言へ〜。一つ君の文學論でも藝術至上論でも拜聴するかな。君も君として何か靈的生活を見出して居さうなもんだね。まあイズムかぶれもせずに居たら罪のなくていゝせ。文學、よからう、面白さうだ。君、それに翻譯家にもなつてはどうかい。二葉亭以後その人なしと言ふことだ。現代の翻譯界はドン底まで腐敗してゐるぞ。誤譯なほ愛すべし。泥棒譯に至つては言語道斷ぢやないか。近來の全集物は大方先人の譯そのまゝ、拜借

と言ふから痛歎に堪はんね。二葉亭と言へば想出すが君、彼れが印度洋上に客死した時「文藝は男子一生の仕事となすに足らず」と捨白を遺して逝つたらう。なあにさ、二葉亭を要せずともだ、敢て印度洋の背景を要せずともだ。それ位のこと俺ごんだつて言へさうなもんぢやないか。いやさ僕元來の持論なんだからね、今更後れ馳せに言ひ出しても残念だから、いろ／＼考へ直した末「文藝は男子畢竟の業に非ず」としたが怎ふかい。未だ不可んかね。それじや「文藝は生活の散歩なり」とでも言ふかな、君達は鼓を鳴して責むだらう。いや本氣になるなよ。全くだ。吾人法會界の偉物たらんとする者と雖、猶ほ文藝の嗜みありて然るべしだね。然り僕輩も大に研究するよ。久能氏、爾後、何分にも御配慮の儀、お頼み致すで御座る……ワハ、。』

『タラ、……生前一杯の酒を樂しむ、何を須ひん……と言ふところだね。ヤレ／＼徹底的に。』  
駒田も磯部も可成に酔ふて居た。

仕方ない——彼は飲めつと思つて飲んだ。飲んでる中に目が暮れた。

『さうだね。どんなに文藝を輕視したつて、文藝の價値低級を眞正面から主張して來る程大膽な者はないね。然し文藝なんてつまらないとか、今の社會的動搖の時代に文藝そのものゝ考察とか論議とかいふものに精力を費すと馬鹿らしいといふ漠然とした考になつて來てる事は僕も認めて居る。而も表面的でなく、所謂潜在的の傾向となつて居るは寒心すべき點だね。畢竟、社會的興味の立場から文藝思想上にしる論議されて、又その方面から文藝價値を力説するのは構はないさ。だがもつとその本質的立場から説を立てんと嘘だね。』

『フーム』星井は感心して聞いて居た。

『例へばだね。文藝が社會問題も取扱ふことに依つて、だ、價値があるとか、社會改造の動機となり機縁となるどころに價値があるといふ見解は、此の外に、以上に、文藝そのものが本質的に一個の社會的價値を持つてゐるものであるといふことも高調されぬといけぬと思ふよ。此の點が理解出來たら今の磯部君の様な野暮は言へん筈だね。成程二葉亭四迷の「文藝は男子一生の仕事となすに足らず」にしる、



橋牛の「吾人は須らく」とか、紅葉の「文章報國」と共に一代の名句として残つてゐるが、これは單に四迷自身の風格を物語る、のとして面白いものだね」

『詩人、やるね。』駒田はビールを飲み乍ら言つた。  
『……………』久能はふいと横を向いて仕舞つた。  
座は暫くしらべた。

『詩人もいゝが、今に阿蘇の煙へドブンが始まらうせ。まあ我々の如く飲んで食つて享樂氣分に浸ることだね。徹底的、客觀的人間として、自己の姿を如實に自覺することだね。享樂で思ひ出すが、モーバツサンの「女の一生」の最後に、「ね、解りましたか。人生と言ふ者は、考へた程そんな好いものでも無く又そんな悪い者でもありませんよ。」つてあつたが。享樂生活の深い甘たるさを味ひ盡した夢多かりし五十年の最後に衝き當つて胸に手を當て、考へた人生觀だね。要するに精神生活はあつてもなくてもいゝものさ。』星井は物の解つた風な口調で恣ふ言つた。  
『理屈は止めたく。——それはさうとして久能君、君達の大音樂會は何日だつたかね。勿論招待し

てくれるだらうね。見にゆくせ。さぞメリーさんもデヨンさんもお集りだらう。なにかい、君がマネヂヤ一の格なんだね。太鼓も叩くだらう。いやタンブリン位は知つてるよ。ギター、セロ、マンドリンランブロップ、ベルモット……何んでも知つてるよ。どうかい僕もオーケストラに入れてくれんか。刺吠でも吹くは、なあに透かしてをけば邪魔にならんさ喃、タラ……………』

久能はもう言ふ範圍でないと思つた。

『丸で子供見たいだね。太鼓叩いたも笛吹いたり。何處が面白いのかなあ。偶に籠城してると思へば三文々學をヒネクツて——つまらないね』

八景水谷を出てからも歸途の一里は此處ことを散々に聞かされた。久能は黙つて聞き流した。

珍らしく螢が飛んで居る。

彼もみんなと共にそれを追つたり、寮歌を歌つたりして遊び乍ら下宿に着いた時は、十二時も疾く過ぎて居た。

今夜の豫習はお流れた。

布団を頭から被つて寝た。無理解な友の嘖みに疲

れて、思存分泣いて見たかつた。

## D

『何んだつてあんな奴に捉へられたんだらう。折角八景水谷の清園でも眺めて清氣を養はうとしたに……』と口惜しく感じた。

二三日前、夜店を素見して買はされたサイネリヤがもう散りかゝつて居る。

『ふうむ哀れなる者よ、爾の名は武骨漢、芝居活動に安い享樂機關を求め様とする。官能的美觀に訴へることを知らんで、官能的刺戟に興味の満足を得やうとする、それで社會の道德的要求が許すか。ポツタキヤリーの幻想曲は味へんでも、明るい感覺の世界に自由に解放してくれる洋樂を解し得ない不幸者なんだ、チエツ俺に翻譯家になれつてさ。言へた義理か。何のこつたい阿呆らしい。』

「工教授が何んと言つたけ。學校のことを一本調子にやるのが實際知識だつて。藝術の鑑賞もなく只講義を後生大切と暗記する。それが實際知識で近道である。成程尤もだ。此の論法からゆくなり人生の實

際營養はおまんまである。おまんまさへあれば腹が膨れる。だから熱心にお上りなさいと言ふ道理だ。ココア、汁粉團子みんなつまらない。生活の遠道だ。只實際食物で人生をおつ通しなさい。それが人生の速道である。人生の速道とは——死ではないか。死へ急ぎなさい。それが安全でもあるのだ……おつと待ちね。此座論理はあつたか知らん。こうつと、實際知識は光明への近道である。實際食物は常暗——死への近道である。して見ると同論法に填めるのは無理か、米だけで生命を保たうとは余りに肉體へ對して慘酷である如く、人生を實際知識で充たし非藝術に終へるもの、悪くはないが余りに現金的ではあるまいか。満更ら論法の錯誤でもなさうだ。さあ解らないく。』

彼は未だ部屋に寝轉んで憤慨して居る。

——九、六、九稿二〇、二二七改稿——